

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「当季雑詠」

菜の花や牛と語ら・う暮しなる

竹崎 光子

〔評〕周到な用語に情感の籠った句である。「牛と語ら・う」とだけで家族の事も生活の様態も何もいってないが、そのことが却って句の内容を鮮明にしている。農耕に必要ななくなった昨今ではあるが、牛は犬猫のペット等とはまた違った存在であり、家族の一員である。肉牛としてあるいは子牛を生産する目的で飼養するなどの考えは毛頭ないのである。

「語ら・う暮し」がすべてを物語っており、日常の生活、家族構成まで見える思いがする「菜の花や」で切れて、作者とは距離を置いていっばい咲いている情景を詠んでいる。思い入れを見せずに、さらりと詠んだところがすごい。

いみじくも花の山荘ロケ最中

川上こよね

〔評〕花見に行った山荘で、偶然の出合い

である、「いみじくも」とあるから、適当なとき、うまい具合にといったところだろう。桜咲く山荘で映画撮影が行われている最中だった。予期しなかった、めずらしい情景であつただけに、その束の間のよろこびは大きい。説明のいらぬ句である。

考える人となりおりおぼろの夜

津田 久美

〔評〕早春のおぼろ夜、作品の前に、もう一人の自分を置いて春愁のロダンを想起し考えているのである。うれしき、寂しき、過去と未来、それもこれも含めて、そこはかとなく考えさせられる、春という朧夜には何となくそんな要素があるのかも知れない。

清明や文学館の一弦琴

森元二美子

ほろほろと風の白木蓮母百歳

友草 水月

橋ひとつ渡れば違ふ春がある

間 浩太

爛漫の桜の中の古城かな

松岡きよ子

春の城お国訛りの乱れ飛ぶ

小島 良

花過ぐも齡めでたし喜寿の夫

刈谷 志津

記念樹の若木の桜咲きにけり

大川 節弥

ふらここやし長目のイヤリング

岡本とも子

日輪の見えぬ真昼の葱坊主

片岡 包女

体内の歯車正常さくら咲く 大西 昇月

城売って暮す写真屋春の雪 水田雅吉子

お地蔵の赤い前掛け早稲植える 大西みどり

しがらみを絶ちきりたきや春シヨール 中野 好子

つくしんぼ風の便りをききながら 吉良 芙美

細流に優し声あり春の川 川村 博子

身の丈と高さを競う記念花 森岡 照月

白鷺の眺めてをりぬ畦を塗る 榊原喜美子

又とない一日賜る花の旅 川村千因子

婿どのと飲もう肴の野蒜振る 井上 郁子

徒遍路おぼろの月に入りけり 楠目 哲郎

畑仕事なすこと多し卯月かな 筒井 眉躬

永き日や田畑に人の動きあり 渡辺万利子

木の芽雨底を尽きたる頭痛薬 中屋 桜子

風に舞う舗道散り敷く花吹雪 弘瀬うき子

初蝶や孫手を振って遠ざかる 伊藤 たみ

雨止みて清明の風白きもの 川村 愛

春行くや手の甲に老斑一つ殖え 筒井 文

うぐいすやむかし平家の隠る里 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句  
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

867-2133

デンマーク人形劇

## 「ラマシャンへの道」公演

デンマークのモノゴイル劇団による人形劇が5月12日(金)吾北中央公民館で公演されました。当日は約100人の方が来場し、珍しいデンマーク語での人形劇を楽しみました。また公演後には出演者との交流の時間もあり、記念写真の撮影などがおこなわれました。

